農村系長屋門の利活用実態とその持続性に関する研究

栃木県宇都宮市・高根沢町を中心とした事例的検討

UTILIZATION AND SUSTAINABILITY OF NAGAYA-MON GATE IN RURAL AREA

Case studies of Utsunomiya city and Takanezawa town in Tochigi prefecture

三橋 伸夫*, 本庄 宏行**

Nobuo MITSUHASHI and Hiroyuki HONJO

The study aims to clarify actual conditions of the Nagaya-mon gate focusing on utilization and its owner's intension to maintain, in order to obtain clue of preserving the gate. Utsunomiya city and Takanezawa town, Tochigi prefecture, were chosen for investigation because many Nagaya-mon Gates of rural type now exist in the area and these two local governments have both launched local landscape plan referred to the gate. Observation survey as well as hearing and questionnaires to the owner have been put into practice several times from 2008 to 2014.

The conclusions can be summarized that in spite of the problems such as maintaining expenses, the owner's attachment and pride of the Nagaya-mon Gate is still observed, as they conceive that Nagaya-mon Gate is the symbol of their family's history. It can also be said that Nagaya-mon Gate would be maintained for the future, because facing damages by the Great East Japan Earthquake, majority of the injured gate were repaired

Keywords: *Nagaya-mon Gate, Rural Type, Utilization, Sustainability, Symbol, Landscape*

長屋門, 農村系, 利活用, 持続性, 象徴, 景観

1. はじめに

1.1 研究の背景

元来、武家屋敷で用いられた長屋門は、民家でみられるようになったのは近世からといわれ、当初は名主など特定の上層農家にのみ許された門構えであった^{注1)}。明治期に入り庶民に対する建築の規制がなくなると、長屋門を構える家が多くなっていくが、規模が大きく見た目も堂々とし、財力を誇示するのにうってつけであり、かつ、物置や蔵として利用できる実用性が高かったため普及したと言われる^{注2)}。

長屋門は、代々その家に受け継がれ、運用に当たって長期利用が図られつつ、屋敷構えとして維持されてきた^{注3)}。栃木県にあっては、広々とした田畑とうっそうとした屋敷林を背景に佇む長屋門を持つ農家は、農村景観としても貴重な存在である^{注4)}。さらに、長屋門は地域の歴史を象徴する存在として、公共施設あるいは商業施設の一部として移築、新築されており、建築様式としての実用性、象徴性に富むものである^{注5)}。

1.2 研究の目的

本研究は、農村地域の民家における長屋門に着目し、建築計画的な観点から長屋門の利活用に関する実態を解明して、地域景観の形成に重要な役割を果たし得る長屋門の今後の存続可能性について知見を得ることを目的とする。

1.3 農村系長屋門

元来、武家長屋門から派生した、換言すれば、もとは同一の系統で中世末期から近世初期において分化したと考えられる農家長屋門は、構造や意匠において独自の発展を遂げたと考えられる。本研究ではこうした建築史的な議論は措き、市街地ではなく主に農村に立地するものを対象とするため、武家長屋門に由来する場合が多いと考えられる市街地系長屋門に対して、便宜的に農村系長屋門と呼ぶ(以下、単に長屋門と記す)。

1.4 対象地域

長屋門はほぼ全国に分布する門の様式であり、屋敷構えにおける位置により表門、裏門などと呼ばれたりもする。形態や細かな意匠において地域性は認められる^{注6)}ものの、門の両脇に蔵や物置など内部空間を配置し、大きく屋根を架け渡す建築形態に大きな差異は認められない。そこで、本研究では研究対象地域を主に栃木県の宇都宮市、高根沢町とする。両市町域の農村部には長屋門が多く現存し、農村景観要素として保全の必要性が景観計画に謳われていること、行政の関心が県内他市町と比較して高いことが選定の理由である。

2. 研究方法と調査方法

2.1 既往研究

星野は、宮城県栗原市を対象に、地域に多く残る長屋門をまちづくりにおける地域資源ととらえ、その実測等を通じて実態を報告している^{注7)}。安武・大月らは茨城県美野里町(現小美玉市)を対象に、

* 宇都宮大学地域デザイン科学部 教授・工博

** 宇都宮大学地域デザイン科学部技術部 技術専門職員

Prof., Faculty of Regional Design, Utsunomiya University, Dr.Eng.
Technical Staff, Faculty of Regional Design, Utsunomiya University

農村系長屋門の成立過程や立地形態について分析し、家屋としての利活用の変遷についても追究しているが、所有者の意向については対象としていない^{注8)}。

また、民家緊急調査報告で取り上げられることはあっても、民家は母屋が中心であり長屋門を詳しく取り上げてはいない^{注9)}。建築歴史意匠の分野においては、長屋門は附属的な建物であることから、国重要文化財あるいは国登録文化財に指定された長屋門の修理報告書の類は多いが、文化財としての建物に着目しており、本研究のように一定の地域において利活用の実態や所有者の意向について分析した研究は見当たらない。

2.2 研究方法

門とそれに付属する室という実用性と、家の格式に係わる象徴性とを併せ持つと考えられる長屋門について、前者については具体的な用途とその変遷を把握することで、農家の生活様式が変化することでの用途への影響について解明する。また、用途や生活様式の変化により生じた不具合、不効率など、存続可能性を阻む要因を明らかにする。さらに増改築の実態を把握することにより、長屋門の利活用について所有者の意向を間接的に捉える。

後者については、所有者の長屋門に対する意向（存続使用または取り壊しの意向、屋敷構えや地域景観における役割の認識等）を把握することで、実用性以外の存在意義を明らかにしようとする。

2.3 調査方法

長屋門の分布を把握するために、ウェブサイト上に提供されている地図検索ソフトを利用して建物形状から長屋門の位置を推定し、これを現地で確認するという方法をとった。この結果明らかになった長屋門の数は宇都宮市 156 であった。調査は 2008 年 10 月から 12 月にかけて行った。現地踏査において建築的構成の特徴（屋根・壁の形式、材料、扉、潜り戸等）を把握し写真撮影を行った。所有者に面会できた場合は、ごく簡単な聞き取りも行った。なお、高根沢町では 2009 年に同様の方法で地図上でのみ確認し把握した。長屋門の数は 81 であった。

現地踏査の際、配票調査票を手渡した。配票調査は世帯主に記入を依頼し、建設年、増改築の有無と年代、規模（間口・奥行）、ならびに所有者の意向について把握した。宇都宮市を対象に行った第 1 回調査（2008 年、調査Ⅰ）は配布数 156、回収数 110（回収率 70.5%）であった。宇都宮市および高根沢町を対象に郵送で行った第 2 回調査（2014 年、調査Ⅱ）は、配布数 139、回収数 80（回収率 57.6%）であった。内訳は、宇都宮市で配布 58、回収 38、高根沢町で同 81、42 である。調査Ⅱの宇都宮市分については、調査Ⅰの集計結果を郵送し、今後再度の配票調査等に協力してもよいとの回答を得た世帯についてのみ対象とした。

配票調査に加えて、宇都宮市、高根沢町を対象に 7 戸の長屋門所有者に詳細な聞き取り調査を行い（2014 年、調査Ⅲ）、長屋門の維持管理を継続している背景、利活用の変遷、長屋門への思い、今後の利活用意向などについて把握した。この聞き取りでは、現在の日常生活およびこれまでの家族、家の歴史などについて話を伺う中で長屋門との関わりを尋ね、回答者（世帯主）の自然な回答を得よう配慮した。

なお、2009 年、2010 年および 2015 年にも調査を行って、長屋門をもつ農家の屋敷構えと経年的な建物構成の変遷、さらには長屋

門の保存・活用方策などについて把握したが、これらについては別の機会に報告する予定である。

3. 長屋門の建築的な諸特性

調査Ⅰにもとづき、宇都宮市における長屋門の実態とその利活用について記述する。

3.1 長屋門の分布

2008 年の調査で明らかになった長屋門 156 棟は、宇都宮市全域に渡って広く分布している（図 1 参照）。特に、長屋門は宇都宮市中心部よりも農村部に多く存在する。また、長屋門は限られた地域に集中して建てられているという傾向が見られた。長屋門を建てるのが地域的に流行した、長屋門を建てられる財力をもつ家が地域的にやや偏りをもった、ということを示すと考えられる。家人に対する聞き取り調査では、江戸時代末期まで庄屋・名主を務めたという家に長屋門は多く見られた。

図 1 宇都宮市の長屋門の分布

図 2 長屋門の平面
(左の写真のもの)

写真 1 宇都宮市における長屋門の例

限られた地域に集中する背景として、現地踏査における聞き取りから推察できることは、本分家関係にある家同士が同調して建設した傾向があるためと考えられる。また、ある地区では、鉄道建設のために先祖伝来の農地売却を強いられた隣接する複数の農家がそろって売却代金を長屋門建設に当てたことも聞かれた。このように、現在でも数多くの長屋門が見られる宇都宮市であるが、過去と比較すると既に多くが失われてきていることも事実である^{注10)}。

3.2 建築意匠の特徴（表1）

屋根形状は入母屋が最も多く、屋根材は瓦（桟瓦）が最も多い。大谷石を葺いた石屋根の長屋門が1棟見られた。壁材は正面、背面ともに漆喰が最も多い。腰壁材も正面、背面ともに石材（横目地）が最も多い。腰壁に使用されている石材は周辺地域で採掘された大谷石および大谷石類似石である。石は縦目地のものが古く、横目地のものが新しいと言われる。扉は取り付けられていないことが多く、潜り戸は左右同一の材料および形状が多かった。特に、潜り戸は左右ともに枠のみで形式化したものが多かった。農家に造られた長屋門は屋敷構えのシンボルではあるが、門としての格式よりも使いやすさが重視された結果、扉や潜り戸を設けなかったと考えられる。宇都宮市では「入母屋－桟瓦－正面・背面壁材：漆喰－正面・背面腰壁材：石横目地－扉：なし－潜り戸：左右ともに枠のみ」という構成をした長屋門が19棟と最も多く見られた。

表1 長屋門の建築意匠

屋根形状		屋根材		正面壁仕上げ材	
入母屋	113	瓦（桟瓦）	112	漆喰塗	135
切り妻	23	金属	39	大谷石張	8
寄棟	20	その他	5	板張	4
				その他	9
正面腰壁仕上げ材		扉の有無		潜り戸の有無	
大谷石張	96	あり	54	あり	30
板張	39	なし	102	枠のみ	85
その他	13			なし	41
壁仕上単	8				

3.3 長屋門の建設年

宇都宮市の長屋門は建設年の明確なもの47棟のうち、1875年から1899年の間に建てられたものが最も多く18棟であった（図3）。次いで、1850年から1874年の11棟、1900年から1924年の9棟である。建設年が明確ではないが「明治」、「明治初期」という回答を含めると明治時代に建てられた長屋門は45棟に上る。さらに、江戸期に建てられたと判別できる長屋門は19棟と1割強を占める。明治時代となって建築規制が解かれて以降、経済力のある農家を中心に長屋門建設が流行したことを示すものと考えられる。しかし、1925年の昭和期以降、長屋門はほとんど建てられておらず、その後、長屋門の必要性やステータスシンボルとしての意味が薄れてきたことを示すと考えられる。

図3 長屋門の建設年代

3.4 長屋門の規模

宇都宮市の長屋門は間口が8～10.5間、奥行が2～3間のものが大半を占める。奥行と比較して間口の寸法に分布の幅が大きい。これは長屋門の間口が敷地形状によって制約を受けるためであり、これに対し、奥行は門として一定の寸法に収まっている。典型的な寸法は間口10間・奥行2.5間で16棟と最も多かった（表2）。次いで

で間口10間・奥行2間が7棟、間口9間・奥行2.5間が7棟であった。建坪が最大のもは間口12間・奥行4.5間のものである。もともとの長屋門の奥行は2～2.5間と考えられるが、後部下屋などの増築によって奥行が2間大きくなり4～4.5間の長屋門が出現したと考えられる。

表2 長屋門の間口と奥行の寸法

	間口(間)	奥行(間)								合計
		1	1.5	2	2.5	3	3.5	4	4.5	
	5					1				1
	5.5									0
	6			1	2					3
	6.5									0
	7			2		1				3
	7.5				2					2
	8			5	6	1				12
	8.5			4	1	2				7
	9	1		3	7	1	1			13
	9.5			1	5	1	1			8
	10			7	16	1				24
	10.5				5					5
	11		1		3	1	1	2		8
	11.5									0
	12				4	1			1	6
	12.5				1					1
	13			1		1				2
合計		1	1	24	52	11	3	2	1	95

3.5 長屋門の改修

長屋門の改修による意匠的变化を見る。屋根材については83件が該当した（複数回答）。茅葺きから瓦葺きへの変化が最も多く31件、次いで瓦葺きから瓦葺き（変化なし）が16件、大谷石葺きから瓦葺きが15件、茅葺きから金属板葺きが14件となっている。茅葺き、大谷石葺きが大きく減少し、瓦や金属板に置き換わっていることが分かる。

壁材については該当36件中、漆喰から漆喰（変化なし）が最も多く22件、板壁から漆喰4件、土壁から漆喰3件である。腰壁材については該当29件中、板壁から大谷石張が12件と最も多く、次いで大谷石張から大谷石張（変化なし）が7件である。

これらの改修は、いずれも1950年以降に多く行われている。高度成長期に、長屋門の外観は大きく変化したことが推測される。

4. 長屋門の利活用実態

次に、同じく調査Ⅰの結果にもとづいて、長屋門の利活用とその変化について述べる。

4.1 長屋門の室の現在用途

長屋門は左右の室を単一の用途のみで使用する（110棟中44棟）よりも複数の用途で使用する（110棟中61棟）割合の方が大きい。これは単一用途で使用するには、左右別室であり、各室も大きいと考えられる。長屋門の室は、農業用資材・機材物置としての用途が

図4 長屋門の調査時点での用途（複数回答）

最も多く、次いで生活用品物置であり、総じて物置として利用されている例が圧倒的に多い。食料貯蔵庫は 15 棟と比較的多いが、単一の用途で使用されている例はなく、他の用途と組み合わせられる。居室も 15 棟であり、農業用資材・機材物置や生活用品物置と組み合わせられている例が多い。また、長屋門の背面の壁を取り払い、下屋を付属させたりすることで、作業場や車庫として利用している事例もあった。事務所や画廊など物置や居室以外の用途も少ないが見受けられる(図4)。

4.2 長屋門の通行機能

屋敷周囲の取り付け道路の整備などにより、長屋門が屋敷アプローチからはずれたり、あるいは自動車の出入りのために別のアプローチを新たに設けたりすることで長屋門が門としての機能を失う場合がある。こうした場合、室に挟まれた空間は物置化したり駐車場化する。このため、長屋門が人ないし車の通行機能の有無、また、室に挟まれた空間の収容機能の有無についてみた。

結果は、「通行機能あり／収容機能なし」が 156 棟中 124 棟と最も多い。これにより長屋門が「門」としての本来の出入りの機能を依然として持つ場合が大半であることが分かる。何棟かの世帯では門扉の開閉を行っていた。また、かつては長屋門の通路部分を作物乾燥など作業場として利用していたという話も聞き取れた。

4.3 長屋門の用途変遷 (表3)

長屋門の室の用途変化とその年代について回答のあった 57 棟についてみた。用途変化は 1950 年～74 年に最も多く生じている。戦後の農地改革により、長屋門の用途のひとつであった小作米の貯蔵という役割が失われたためと考えられる。この時に用途は生活用品物置に最も多く変化している。また、1925 年～49 年および 1950 年～74 年には、居室が物置、貯蔵庫に多く変化しており、逆に 1975 年～99 年には物置、貯蔵庫が居室に変化している。前者は小作人の住まいや戦後の疎開者の一時的な住まいであったと推測され、後者は趣味室、子ども室などである。捉えられた実数は多くはないが、第二次大戦前から戦後にかけて、長屋門の用途は大きく変化したことが推測される。

表3 長屋門の用途変化とその年代 (複数回答)

	食料貯蔵庫	農作物貯蔵庫	うまや	農業用資材・機材物置	生活用品物置	居室	その他	不明
2000 変化後	1	1	0	1	2	0	1	0
変化前	0	1	0	0	1	1	1	2
1975 変化後	0	0	0	1	2	4	4	0
変化前	0	2	0	5	2	1	0	1
1950 変化後	0	3	0	2	8	0	3	0
変化前	0	2	1	4	0	5	2	2
1925 変化後	0	0	0	8	4	1	1	0
変化前	0	3	0	1	1	7	1	1
1900 変化後	0	0	0	3	1	2	0	0
変化前	2	0	0	0	0	1	1	2
1875 変化後	0	0	0	0	0	0	0	0
変化前	0	0	0	0	0	0	0	0
1850 変化後	0	0	0	1	1	0	0	2
変化前	0	0	0	0	1	1	0	2

5. 長屋門に対する所有者の意向

次に、調査Ⅰおよび調査Ⅱにもとづいて、長屋門に対する所有者の意向について明らかにする。

5.1 長屋門の改修・増改築と必要性の認識との関係 (調査Ⅰ)

長屋門の改修や増改築の有無と必要性の認識との関係をみた(表4)。「増改築ありー必要性あり」が最も多く、長屋門の改修、増改築を繰り返し維持しながら活用してきたことが分かる。一方、「増改築ありー必要性なし」の場合は9棟と少ない。増改築はしてきたが、今までの機能や用途が失われたために、現在ではもう長屋門の必要

表4 長屋門の増改築と必要性との関係

		必要性				合計(棟)
		あり	なし	どちらでもない	無回答	
増改築	あり	60	9	9	7	85
	なし	17	2	3	0	22
	わからない	1	0	0	0	1
	無回答	0	2	0	0	2
合計(棟)		78	13	12	7	110

性はないと考えていると思われる。

5.2 長屋門が現在まで維持されてきた理由 (調査Ⅰ)

「代々受け継がれているから」が圧倒的に多い。代々受け継がれてきた長屋門を自分の代で壊してしまうのは、先祖に申し訳ないという思いもあると考えられる。また、「生活上重要な用途を持っているから」の割合が少なく、長屋門の「必要性あり」(110 棟中 78 棟)といっても、長屋門自体の用途はさほど重要ではなく、受け継がれた長屋門をできるだけ有効に利用しようとしていると考えられる(図5)。

図5 長屋門が現在まで維持されてきた理由

5.3 長屋門を維持していく上での問題点 (調査Ⅰ)

「維持費がかかること」と「税金が余計にかかること」をあわせると、約5割の世帯が改修費や固定資産税などの費用を問題にしている。次いで「自動車や人の出入りに不自由なこと」が多く挙げられているが、これは一般に長屋門通行の幅や高さに制約があり、車での出入りがしづらいためだと考えられる(図6)。

図6 長屋門を維持していく上での問題点

5.4 長屋門の今後の利活用予定・方法 (調査Ⅰ)

「予定なし(現在の用途と同じ)」が110棟中97棟と最も多く、次いで「予定あり」が7棟であった。「予定あり」の利活用方法をみると、農業用資材・機材物置や生活用品物置を改修して居室としたり、文庫や資料館といった地域にも開かれた長屋門の利活用方法を予定している。調査した中で国指定重要文化財となっている長屋門も1棟あり、物置から展示場として利活用を予定している。また、元々居住を目的とした、1975年以降に建設された2階建ての長屋門風造りの住居が1棟みられた。

5.5 東日本大震災による被害とその後の修繕状況

2011年3月の東日本大震災により宇都宮市および高根沢町は震度6弱ないし5強の揺れに襲われた。こうした地域において、長屋門がどの程度被害を受け、また、どの程度修繕等なされているかを

表7 長屋門所有者へのききとり概要

	Sy 邸	Nn 邸	It 邸	Fs 邸	Fh 邸	Oz 邸	Hs 邸
建設時期	1871 年	1878 年頃	1898 年頃	1901 年	1716～1736 年頃（享保年間）	1849 年頃	明治初期
修繕・改築など	長屋門 1903 年頃：屋根/茅葺き→セメント瓦、壁/漆喰塗り→白壁、腰壁/腰板→大谷石張り（一部不詳：基礎木付→瓦） 2013 年：屋根/セメント瓦→本瓦	1878 年頃：建設（茅葺屋根・腰板・漆喰塗り） 1974 年頃：門柱持ち上げ（石を入れて高くした） 1977 年頃：屋根/茅葺き→瓦 1982～1983 年頃：建て直し	1973 年：屋根/茅葺き→瓦 2012 年：屋根/瓦葺き直し	1957 年頃：移築 1972 年頃：屋根/茅葺き→瓦、腰壁/板張り→石張り、門柱取外し	1957 年頃：屋根/茅葺き→トタン 1999～2000 年 建て替え 屋根/トタン葺き→瓦、漆喰（一部トタン）→漆喰、腰壁/なまこ壁→板張り	1897 年頃：屋根/茅葺き→トタン 1998 年：建て替え 屋根/トタン葺き→瓦、壁/腰壁→漆喰、腰壁/腰壁→板張り、土台/大谷石→コンクリート	1972 年：長屋門解体後組み直し、屋根/茅葺き→瓦 1985 年：床板張り替え
	門以外 1961 年：母屋改修 年不詳：土蔵取り壊し→子ども世代の家	1983 年：母屋建て直し	1898 年：蔵建設 1999 年：母屋建て替え/その後車庫増設	1956～1957 年頃：母屋焼失→現在の場所に新築	1979 年：母屋取壊し 1957 年：蔵の屋根/茅葺き→トタン	1849 年：蔵建設 1949 年：内壁/漆喰塗り→板張り、床/畳敷き→板張り	1949 年頃：四脚門/古風で倒れる・蔵者支社 1980 年頃：母屋/玄関・うまや改修 1984 年頃：母屋/水廻り改修
長屋門の利用用途	昔 右：元は納屋・農具置き場として利用。30 年程前に保冷庫を入れた（椎茸栽培用）	右：作業場（縄張り、依持ち掘みつくり、釜編みなど）屋根裏に藁の保管	右：乾燥機置き、糶摺りなどの作業場 左：物置（倉庫代わり）	物置 作業場（俵積みなど）	分からない	右：飼葉保存用 左：農業機械（精米機など）置き場、外側：燃料（松葉）置場	冬場の作業場として使用 屋根裏は藁の貯蔵用
	現在 右：糶の乾燥機などの資材置き、米のストック用 左：保冷庫（野菜用）が主、雑務用の物置でもある	右：米の糶摺り、貯蔵空間 左：農作業用機械	右：農業用資材 左：2014 年よりテーブルと椅子を置いて、休憩スペースとしている	生活用資材	右：車庫 左：生活用資材	右：家財置き場 左：家財置き場	右：車庫、農業機械置き場、トイレ 左：夫婦の住居
家柄など	名主を務めた（古文書より）	大地主、村の総代を務めた	代々農家だった	大地主だった	問屋だったと伝わる	庄屋だったと伝わる	武家と繋がりがあった
家に伝わる事柄など	・長屋門を建設したのは3代前の当主。天明の飢饉の際、村の年貢を立て替えて一度潰れるも、4代前から3代前にかけて再興したと伝わる。 ・戦時中に金属製の門飾り金具が供出でなくなる。	・かつては1km 先まで他人の土地を踏まずに行ける藁の土地を持っていた。 ・3代前が長屋門を建設したが、大の酒好きで土地を手放し、2代前の当主が買い戻した。	・長屋門以前には四脚門が建っていた。敗戦により一度家を潰すのが、4代前が1代で盛り返し、再興した際に長屋門を建てた。戦時中は目立たないよう黒い塗装をした。	・多くの小作人を雇っていたと伝わり、女将(妻)が切り盛りしていた。 ・長屋門移築は、以前住んでいた場所から曳いてきたと伝わる。	・区画整理以前は、長屋門に向って長いまっすぐな道が続いており、今以上に門が映えていた。	・寺に保管していた過去帳が焼失したため、詳細は不明だが、室町時代に家を構えたと伝わる。 ・戦時中に、銅製の門の飾り金具が供出でなくなる。	・改易となった宇都宮氏の家臣と繋がりがあったと伝わる。 ・長屋門は国の重要文化財になるという話が持ち上がったが登録していない。 ・1985 年の洪水の跡が長屋門に残っている。
農業経営規模	田（米）：約 10.5ha（半分は借地） 裏作で麦を 3ha の広さで経営	田（米）：3.75ha	田（米）：35ha 経営（うち所有地は 2～3ha） 麦：10ha、大豆：10.8ha	田（米）：350a（小作）	田（米）：240a、大豆：230a	梅畑：3ha 田（蕎麦）：380a	田（米）：200a 畑（蕎麦）：380a
次世代の意識	息子にとっては使い道はなさそうだが、景観的な存在価値は認めている。	娘は関心がなさそうだが、息子は古いものが好きで、長屋門を残してくれたそう。	娘にとってはあって当たり前かもしれない。農家を継ぐことには積極的。	息子は将来のことは考えていない。壊れるまでは維持してくれると思う。	息子、娘含め親族が建て替えて賛成。将来は息子が長屋門を継ぐだろう。	息子は特別何も言うてはいないが、自分の物を出し入れているので、それなりに考えてはいるだろう。	息子は数年前に後を継いでいる。長屋門についての考えは不明。
長屋門が維持されてきた理由	屋敷の景観としてあったほうがいい。台風などの際、母屋の防護になる。長屋門建設の伝承を聞いたので。	農村地帯の景観として、長屋門は良いものだから、屋敷構えに映えるから。	長屋門と裏山という屋敷の構え方が一種のステータスであり、家のシンボルだからではないか。	家の歴史の象徴であるから。	昔からあるものだから、代々続いてきた歴史ある家に長屋門が無いのは格好がつかないだろうと思いつたから。	家の歴史の象徴であり、代々受け継がれているものだから。先代たちが大事にしてきたものだから、自分の代では残したかった。	文化的なものにお金をかけたたいし、地域の風景の一部になっているから。屋敷構えになくってはならない。
長屋門の問題点	車が出入りするのに不便である。	農作業用の車の出入りに不便である。現代の農業には適していないと感じる。	修理が難しくなっていること。	壊すのにも費用がかかること。	特に言及なし。	維持費や修繕費がかかること。修繕できる職人が少ないこと。車の出入りが不便であること。	特にない。
今後の利用	特に言及なし。	特に言及なし。	内装を直して事務所を作ろうと考えている。	壊れるまではこのまま。特に以上に入手はない。	特に言及なし。	現状維持（都市計画道路で必要と判断し、それまでの間は）	リフォームして、バルコニーの飲食店にする予定。

見ることで、所有者の長屋門維持に向けた意識を探った。調査Ⅱ（2014 年実施）の結果にもとづく。

震災で、何らかの被害を受けた長屋門をもつ世帯（回答 80 世帯中 48 世帯）のうち修繕などが済んでいる長屋門は半数を超える（48 世帯戸中 30 世帯）。特に何もしていない世帯も理由については「修繕するほど目立たないから」が約半数であり（18 世帯中 10 世帯）、今後の老朽化に合わせて修繕する可能性も考えられる（表6）。このように、震災対応の上から見ると、長屋門がこれからも維持されていく可能性は十分にあると認められる。

表5 東日本大震災での被害状況

	宇都宮市	高根沢町	計
何らかの被害があった	18	30	48
被害なし	20	11	31
無回答	0	1	1
計	38	42	80

表6 被害を受けての対応および修繕しない理由

被害を受けての対応	宇都宮市	高根沢町	計
修繕済みである	11	19	30
長屋門自体を建て替えた	0	1	1
長屋門を取壊した	0	0	0
特に何もしていない	7	11	18
無回答	0	0	0
計	18	31	49
修繕しない理由			
修繕するほど目立たないから	2	8	10
修理費がかかるから	5	1	6
これから改修などの予定があるから	0	0	0
その他	0	1	1
無回答	0	1	1
計	7	11	18

6. 長屋門のケーススタディ

長屋門が家によってどのように維持されてきたか、どのような歴

史的な変遷をたどって現在に至ったかを把握するため、宇都宮市および高根沢町から無作為に選定し調査可能であった7世帯についてききとり調査を2014年に行った（調査Ⅲ）。結果概要を表7に示す。

6.1 長屋門と家の歴史

7世帯はいずれも100年以上前には最初の長屋門が建てられている。明治期より前に建てられた2例は、いずれも庄屋を務めたり問屋を営んでおり、それ以外の5例も名主、大地主など上層農家であり、長屋門は継承されてきた屋敷構えの形式であったことが改めて分かる^{注10)}。例えば、Fh 邸は江戸期享保年間の創建と伝えられ、長らく茅葺きの長屋門を維持してきたが、戦後に金属板葺きに変え、2000年に新しく建て替えた。現在は高齢女性の一人暮らしであるが、息子夫婦が戻ってくる予定があるという。

上層農家とはいえ、経済的には大きく変動した例（Nn 邸、It 邸）があり、また、等しく農地改革も経験しているが、大規模な稲作経営を実現してもいる（Sy 邸、It 邸）。経営規模の大小はあれ、7例とも農業経営は継続している。

長屋門はまた、家の歴史とも密接に絡んでいる。例えば、Fo 邸では、かつての母屋が火災で焼失し新たな場所に母屋を建てる際、無事だった長屋門を曳いてきたと伝わっている。また、Nn 邸では、現世帯主の配偶者が嫁入りの際、嫁入り道具を運んだ自動車が門を通れなかったということがきっかけとなり、土台をかさあげして門の改修を行った過去がある。

6.2 長屋門の保全継承に関する意識

回答者である現世帯主はいずれも長屋門を保全すべきという意向をもつ。その理由は代々受け継がれてきたからという一見消極的とも受け取れるものであるが、他方、家の歴史の象徴であり、また、屋敷構えには欠かせない存在として、さらには地域の景観に寄与し

ているなどの意識も同時に窺える。

後継ぎ世代の意識は、世帯によって異なる。例えば **Nn** 邸では、歴史的な価値が見出されることから、今後も維持されたいと考えられている。また **Oz** 邸では、長屋門について特に言及は無かったが、倉庫機能として使用している現実がある。**It** 邸、**Hs** 邸では、長屋門について言及はしないものの、後継ぎは家を継ぐ方向であり、家の概念に長屋門が含まれていると考えられる。

今後も維持していくために改修して事務所 (**It** 邸)、あるいは飲食店など (**Hs** 邸) として活用する意向も聞き取れたが、都市計画道路の指定にかかり将来的には取り壊さざるを得ない可能性がある (**Oz** 邸) など、自らの意思では保全がかなわない例も見られた。

7. おわりに

農村系長屋門は代々継承されてきた農家屋敷構えの形式であり、江戸期の村役人である庄屋、名主を務めた農家により伝わったが、明治期以降は一般の経済力をもった農家にも広まった。

宇都宮市および高根沢町を対象に行った長屋門の利活用の実態と所有者の意向に関する調査から以下のことが明らかとなった。

- 1) 長屋門の多くは明治期以降に建設されたが、江戸期から受け継がれたものもある。
- 2) 現在の用途は農業用資材・機材や生活用品の物置が最も一般的であるが、食料や農産物の貯蔵庫としての利用も見られる。少数ではあるが居室、作業場、事務所などとしても使われる。
- 3) その用途は第二次大戦前から戦後にかけて、小作米貯蔵や小作人居住、戦後疎開者居住から物置や生活物資貯蔵などに変化した例が多い。
- 4) 長屋門は戦後の高度経済成長期を中心に改修が進み、屋根は茅葺き、石葺きから瓦葺き、金属葺きに、また、壁はわずかではあるが板張りから大谷石張りなどに変わり、外観が変化してきている。
- 5) 長屋門所有者は、長屋門がこれまで維持されてきた理由として、代々受け継がれてきたからという理由を挙げるが、一部には屋敷構えや地域景観にとって重要という理由も挙げられた。
- 6) 長屋門に係る問題点としては大きく2つあり、修繕費や税金など維持に関する経済的負担と車や人の通行の不自由さが挙げられた。
- 7) こうした問題点にも係わらず、長屋門所有者は長屋門に愛着をもち、家の歴史や家格を象徴する存在として意識している。

以上、高度経済成長を経て、長屋門はその数を減らしたものの、その家に起きた出来事と共に長屋門が語られることに示されるように、長屋門は家の歴史の象徴であり、そのことが受け継がれて来た原動力であった。こうした観点に立てば、これからも長屋門が維持される可能性はあると言える。所有者個々の家の歴史のみならず、地域の歴史や文化にも係わることに着目するならば、何らかの行政的な施策を今後検討する必要があると考えられる。今後の課題としたい。

末尾ながら、本編をとりまとめるに当たり、橋田佳子（小山市役所）、直井智之（大昌）、田中しおり（トライフォー）の諸氏ならびに長屋門所有者各位には、調査ならびにとりまとめで大きな支援をいただいたことを記して謝意を表する。

注

- 注1) 戦国時代、在地の土豪・地侍と呼ばれる支配層が、公儀領主の家来として出自の土地を離れる者と、地元に残って百姓化する者とに分化するが、後者の帰農した武士層がこの特別な農民たちである。（参考文献 8）
- 注2) 例えば、栃木県大百科事典、栃木県大百科事典刊行会編、下野新聞社、1980.6
- 注3) 参考文献 3) および 4) を参照されたい。
- 注4) 宇都宮市景観計画（平成 20 年策定）、高根沢町景観計画（平成 24 年策定）にそれぞれ長屋門が農村景観にとって欠かせない景観要素であるという認識ならびに、その保全の重要性に関する記述がある。
- 注5) 文献 5) および同 6) を参照されたい。
- 注6) 例えば、東京都三多摩地方では蚕室として使われた中二階屋、二階屋をもつ長屋門が多いという指摘が見られる。（旧田島平良家長屋門総合調査（豊島区立郷土資料館調査報告書 第 19 集）、豊島区郷土資料館、2007）
- 注7) 参考文献 9)
- 注8) 参考文献 10)、同 11)、同 12)
- 注9) 例えば、栃木県の民家一民家緊急調査報告書一、栃木県教育委員会、1982.3
- 注10) 宇都宮市に昭和 30 年に編入合併した旧姿川村について、昭和 34 年に刊行された「姿川村史」には長屋門に関する記述が見られ、昭和 30 年当時、村内で 37 棟を数えたところ。前述の下砥上町では 9 棟と記録されている。今回の調査では 6 棟であったから、50 年ほどの間に 3 棟が取り壊されたことになる。姿川地区全体ではおおよそ 50 年間で半数が消滅していることが判る。
- 注11) 庄屋、名主は江戸時代に村役人の下で村政を担当した村役を指す。西日本では庄屋、東日本では名主の呼称が一般的であると言われるが、論文中ではききとりの回答をそのまま引用した。

参考文献

- 1) 橋田祥子・直井智之・三橋伸夫・金俊豪・本庄宏行：長屋門の建築的構成について—宇都宮市における長屋門の研究その 1—, 日本建築学会大会学術講演梗概集 E2, pp.455-456, 2009.8
- 2) 直井智之・橋田祥子・三橋伸夫・金俊豪・本庄宏行：長屋門の空間構成と利活用実態について—宇都宮市における長屋門の研究その 2—, 日本建築学会大会学術講演梗概集 E2, pp.457-458, 2009.8
- 3) 橋田祥子・酒井智季・三橋伸夫・本庄宏行：長屋門のアプローチおよび母屋との関係—宇都宮市における長屋門のある屋敷構えに関する研究その 1—, 日本建築学会大会学術講演梗概集 E2, pp.451-452, 2010.9
- 4) 酒井智季・橋田祥子・三橋伸夫・本庄宏行：長屋門をもつ屋敷の空間構成—宇都宮市における長屋門のある屋敷構えに関する研究その 2—, 日本建築学会大会学術講演梗概集 E2, pp.453-454, 2010.9
- 5) 酒井智季・加納一真・三橋伸夫：長屋門の地域的活用形態—長屋門の役割と活用に関する研究 1—, 日本建築学会大会学術講演梗概集 E2, pp.587-588, 2011.8
- 6) 加納一真・酒井智季・三橋伸夫：長屋門の保存活用方法—長屋門の役割と活用に関する研究 2—, 日本建築学会大会学術講演梗概集 E2, pp.589-590, 2011.8
- 7) 三橋伸夫：農家長屋門の持続性について—栃木県宇都宮市・高根沢町における事例的検討—, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 農村計画, pp.63-64, 2015.9
- 8) 水本邦彦：村—百姓たちの近世, 岩波新書, 2015, p.69～
- 9) 星野政博：建築物実測調査を通じたまちづくり参加—宮城県栗原市 S 家長屋門実測調査報告—, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 都市計画, pp.787-788, 2008.9
- 10) 安武敦子・大月敏雄・他：茨城県美野里町における長屋門の成立過程—伝統的景観の保全および活用に関する基礎的研究その 1—, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築計画, pp.85-86, 2003.9
- 11) 杉本武志・大月敏雄・他：長屋門の維持管理状況と利用の変遷—伝統的景観の保全および活用に関する基礎的研究その 2—, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築計画, pp.87-88, 2003.9
- 12) 安武敦子・大月敏雄・他：部位別仕上げや増築位置の変遷にみる長屋門の位置付けに関する考察—伝統的景観の保全および活用に関する基礎的研究その 3—, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 建築計画, pp.375-376, 2004.8

UTILIZATION AND SUSTAINABILITY OF NAGAYA-MON GATE IN RURAL AREA

Case studies of Utsunomiya city and Takanezawa town in Tochigi prefecture

Nobuo MITSUHASHI and Hiroyuki HONJO***

* Prof., Faculty of Regional Design, Utsunomiya University, Dr.Eng.

** Technical Staff, Faculty of Regional Design, Utsunomiya University

Nagaya-mon Gate is a mixture of gate and house, which is thought to have been formed and refined in the last period of 16th century. Through various changes of economic and social developing, the gate had been sequentially succeeded to later generation mainly by farmhouse in rural area. Nagaya-mon Gate contributes to local landscape and can be considered as cultural property, embodying local history and culture.

The study aims to clarify actual conditions of the gate focusing on utilization and its owner's intension to maintain, in order to obtain clue of preserving Nagaya-mon Gate. Utsunomiya city and Takanezawa town, Tochigi prefecture, were chosen for investigation because many Nagaya-mon Gates of rural type now exist in the area and these two local governments have both launched local landscape plan referred to the gate. Observation survey as well as hearing and questionnaires to the owner have been put into practice several times from 2008 to 2014.

The conclusions can be summarized as follows:

- 1) the greater part of Nagaya-mon Gate was built after the Meiji Restoration, while a few built during Edo period is seen;
- 2) general use of Nagaya-mon Gate at the present are such as storage for materials and equipments of agriculture, storehouse for foods and farm products, while a few examples such as living space, workspace and office are observed;
- 3) the transformation of Nagaya-mon Gate use is generally described from storage of rice for rent, living space for tenant farmer or war damage evacuee to storage for materials and equipments of agriculture, storehouse for foods and farm products;
- 4) many Nagaya-mon gates have been repaired mainly during the period of high economic growth and appearance of Nagaya-mon Gate has been drastically changed, such as roofs changed from reed roofing or stone roofing to clay tile roofing or metal sheet roofing, wall finishing also mildly changed from boarding to stone pitching;
- 5) owners of Nagaya-mon Gate point out that the reason of maintaining the gate is inheritance over several generations, while importance for premises and its contribution to local landscape are also heard;
- 6) owner of Nagaya-mon Gate complains of taxes and burden for repairing and managing on one hand and inconvenience for passing on the other;
- 7) in spite of the previous problems, the owners' attachment and pride of the Nagaya-mon Gate is still observed, as they conceive that Nagaya-mon Gate is the symbol of their family's history. It can be said that Nagaya-mon Gate would be maintained for the future, because facing damages by the Great East Japan Earthquake, majority of the injured gate were repaired.

(2016年6月9日原稿受理, 2016年10月19日採用決定)